カタクリの花

「ねえ、今度の土曜日、葛城山に登ってみない。」
山登りが趣味の母から、ノリコがそう声をかけられたのは、四月も終わりのことだった。普段から運動があまり好きでないノリコは迷った。
「どうしようかなあ。」
「行こうよ。今の季節は、カタクリの花がきれいに咲いているんだよ。一度、ノリコに見せたいと思っていたんだ。」
とても乗り気な母の声を聞いて、
「じゃあ、行ってみようかな。」
ノリコはしぶしぶ行くことにした。

「さあ、頂上に着いたわよ。」
そんな母の声を聞いて顔を上げると、目の前にはすばらしい景色が広がっていた。はるか眼下に、まるでおもちゃの町のように奈良盆地が見える。山あいを吹き抜けるさわやかな風が、ノリコのほおを心地よくなでていく。
ふもとの駅からここまでの道のりは大変だった。登山道はとても急で、ノリコは登り始めてすぐに汗だくになった。必死に母についていくノリコを追い越して、登山道わきをロープウエーが通り過ぎていく。（ロープウエーで登ればよかったのに……）何度もそう思った。だが、山頂からのこの景色を目にすると、そんなふうに思ったことも吹き飛んでしまう。
「ああ、来てよかった。」
そうつぶやいたノリコに、母が笑いながら言った。
「もうすぐ、もっとよかったと思うわよ。」

葛城山のカタクリ

「うわあ、きれいだなあ。」
目の前に広がる斜面一面に、カタクリがかれんなむらさき色の花を咲かせている。
「ねえ、きれいでしょう。」
得意そうな母の声を聞きながら、ノリコは一本を手にとってよくながめようとした。
「だめよ。」
母の鋭い声に、ノリコはびくっとして伸ばした手を引っ込めた。
「カタクリの花はね、種が育って咲くまでに十年かかるのよ。それは、十年もかけてやっと咲いた花なのよ。」
ノリコは、母の話を聞いてびっくりした。（こんなに小さな花が咲くまでに十年もかかっているなんて……）もっとよく見ようと、ノリコが斜面に向かって足を踏み出そうとしたときである。
「ほら、そこも気をつけてね。」
母の声によく見ると、そこにはカタクリとはまたちがう小さな野草が生えていた。
（この草は何だろう。周りに小枝がさしてある。）
「お母さん、この草は何だろうね。どうして小枝がさしてあるのかな。」
「自分で調べてみてはどう。」
家に帰って調べるために、ノリコが野草を写真に撮っていると、緑の腕章をつけたおじさんが声をかけてきた。
「その野草はミヤコアオイというんですよ。」
そう言って、カタクリに混じってところどころに生えているミヤコアオイの周りに小枝をさしている。
「おじさん、どうして小枝をさしているのですか。」
わたし、調べようと思っていたんです。」
「わたしは、葛城山の自然を守る活動をしているんです。そのミヤコアオイはね、ギフチョウというチョウの幼虫が食べる食草なんですよ。この小枝は、登山客に踏まれないように目印にしているんです。」

カタクリの蜜を吸うギフチョウ

ノリコは、カタクリだけでなく、どうしてミヤコアオイも踏まれないように大事に守っているのか聞いてみた。

「ギフチョウというチョウは、カタクリの花の蜜を吸って生きています。そして、ギフチョウたちが蜜を吸うときに、花粉をつけてくれるおかげで、カタクリは種をつけることができます。カタクリも、ギフチョウたちがいなければ生きていくことはできないのです。また、ギフチョウの幼虫はミヤコアオイの葉を食べるので、ギフチョウはそこに卵を産みつけます。ミヤコアオイがなければ、ギフチョウの幼虫は育たないのです。だから、カタクリの花を守るためには、ミヤコアオイやギフチョウも守らなければならないのですよ。」

ノリコは、それを聞いておどろいた。カタクリの花が咲くまでに十年もかかるということだけでもおどろいたのに、ギフチョウやミヤコアオイもカタクリの花と深い関係があるなんて、思いもよらないことだった。

そんなノリコを見て、おじさんは笑顔でさらに話を聞かせてくれた。

「見てください。このカタクリの群落はね、できるまでに二百年以上かかっているんですよ。」

「え、二百年ですか……。」

「そうなんです。カタクリの種にはね、この葛城山にいるアリたちの好物が含まれているんです。アリたちが、種を自分たちの巣まで運ぶ。そして、そこから新しいカタクリの芽が出る。だけど、アリたちが種を運んでカタクリが一年で広がる範囲は、せいぜい五十センチメートルくらいなんですよ。ここのカタクリの群落は、百メートル以上は広がっているから、ざっと計算してもできるまでに二百年以上かかっているということになるんです。」

ノリコは、初めはただきれいだと思っていただけだったカタクリの群落が、できるまでに二百年以上もかかっていることを知って、そんなカタクリの花をとろうとしたりミヤコアオイを踏みつけそうになったりしたことを思い出して、はずかしくなってしまっ

カタクリの種を運ぶアリ

た。

「カタクリの花の蜜をもらい、花粉をつけるギフチョウたち、ギフチョウの幼虫の食草であるミヤコアオイ、カタクリの種を運ぶアリたち、これらのどれか一つがなくなってもこのすてきな景色は見られないんですね。」

「そのとおりです。この群落は、葛城山の自然全体が、二百年以上もの時間をかけてじっくりとつくりあげてきたものなんです。この自然をこれからもずっと守っていきたいですよね。」

ノリコは、おじさんの話を聞きながら、葛城山に来て本当によかったと思った。

ノリコの心を葛城山のさわやかな風が吹き抜けていった。

○ カタクリだけでなく、ギフチョウやミヤコアオイのことをおじさんから聞いたとき、ノリコはどんなことを思ったのでしょう。

○ 葛城山に来て本当によかったと思ったノリコは、どんなことを考えているのでしょう。

奈良県教育委員会
http://www.pref.nara.jp/gakko/（学校教育課Webページ）